

## 幼児の音楽の獲得

### —音やリズムを伴う言葉のモデルの効果—

Acquisition of the music of the infant

—The effectiveness of the model of words with a sound and the rhythm—

持田京子(埼玉純真短期大学)

Kyoko MOCHIDA

#### (要旨)

1歳3ヵ月と、2歳3か月の幼児が、保育者と簡単な歌遊びをする過程を観察して検討した結果、1, 2歳児が音やリズムを獲得するには、「身体性を感じる」「言葉の持つ音やリズムに気付く」「人と音やリズムを重ねる」ことが重要なポイントになると考えられた。そして、保育者が生活の中で「音やリズムを伴う言葉のモデル」を伝承することで、幼児たちはそれらを自分なりに自由に使い楽しみながら音楽的構築をすると考察できた。

#### (キーワード)

3歳未満児 身体性 音やリズムを伴う言葉の型 音楽的構築

### I 緒言

保育者が幼児の音楽的な学びのために、日常生活の中でどのような方法を取るのかを、幼児教育の現場にいる保育者12人に聞き取りをしたところ、「みなで歌う」「手あそびをする」「楽器を演奏する」「踊る」などが多くあげられた。またその際に保育者が良く使う手段として「ピアノを弾く(9人)」「歌う(10人)」「CD(5人)歌・ダンス」があげられ、その内容としては「童謡」「わらべうた」「アニメソング」「映画の主題曲」「ヒットソング(AKB)」「英語の歌」などがあげられた。これらからは現場の保育者が、保育所保育指針「表現」の内容(イ)②に「保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ」にあるように、日々様々な手段を使って「皆で一緒に」「先生と一緒に」という方法で幼児の音楽的な学びを促していると考えられる。

寺内は、本来音楽は口頭伝達であったことを述べ、「本来口頭で伝えられる音楽を、時間と空間を越えて伝達するために、世界のさまざまな地域でさまざまなシステムの楽譜が考案された。」さらに現在は「視聴覚メディアをおもに同時代の文化の享受に利用してい

る」と述べる。このように現代の幼児音楽自体も、マスメディアの普及により多様化していて、「童謡」「クラシック」「ロック調」などリズムやテンポ、メロディなどの多様化、さらに歌の歌詞も日本語だけでなく、「英語で遊ぼう」など海外の言語も取り入れられるようになっていると考えられる。

これらを振り返ると、音楽伝承の手段が、かつては口頭が多かったのに対して、現在は楽譜、楽器、そして、音楽配信といったように多様化してきたため、音楽伝承において生の「身体」と「言語」という向かい合わせが少なくなるのは当然である。また大人が時間を使ったり、音やリズムを覚えて伝承する労をとらなくとも、スイッチ一つで音楽が流れれば、幼児には受け入れられる。確かに保育現場で音楽指導をしている筆者がみても、「楽譜」「楽器」「CD」など間接的手段を通して幼児に指導することが増えた結果、「口頭」伝承のような、生の身体と言語の直接的な関わりが減少する傾向があっても仕方がないようにも思える。しかしそれらの環境からは、「楽曲やリズムがはじめにありき」になり、生活の中で保育者と幼児が身体を通して、口頭で共に紡ぎ出す音楽が、生まれにくいようにも思

える。小川(2011)は「言語獲得と音感覚との相関性」において、わらべうたの実践から「音楽、言葉、身体の動き」の相関性に注目する重要性を述べている。幼児音楽教育が多様化している現在、小川の述べるように、すでに出来上がった楽曲やリズムだけでなく、幼児の音楽構築とその過程における言葉や身体性にも着目することは重要であると考えられる。

また小林(2010)は「私たちは或る音楽について知っているという状態にある場合、知識として語り得ること以上の多くをその身に宿していることになる」と述べ、「それならば、音楽構築過程において、言語使用は何を対象にして現出するのか」と述べる。さらに小林(2010)は、身体は潜在的な能力システムではあるが、音楽行為において初めから身体を自由に動かすことができるわけではなく、「動かす身体」と「動かされる身体」が存在し、その二重性を発見し、練習することによってその内部分裂を克服していくという。その一見して同化して見える身体の中に「動かす身体」と「動かされる身体」という二重性を再発見することが、音楽構築であり、その内部分裂の克服に「言語使用」が二つの身体を調整しながら結びつけることにおいて、非常に重要であると述べる。これらのことから、幼児音楽教育においても、原点に戻って「言語使用」や「身体性」に着目する必要性がみえる。

幼児の音楽構築における身体性や言語に着目した研究では、前述の他、松本(1999)が「言葉を出発としたリズムアンサンブル」において、オルフによる言葉と動きが結びついた音楽の必要性を述べ、日常に溶け込んだ普段着の言葉が幼児音楽教育にとって必要であることを述べている。また中西(2004)は「幼児音楽におけるコーディネーショントレーニング：言葉と身体の整合性」においては言葉のリズムと身体リズムの整合性を、5歳児の和太鼓の実践から研究している。笹島(2006)の「幼児教育に於ける言葉と音楽そしてコダーイシステムについて」では、教師の言葉掛けによるリズムと抑揚がその育ちに重要であることを述べている。

このように幼児の音楽構築に関する研究はいずれも、「はじめに音楽ありき」ではなく、幼児の音楽構築における言葉の重要性を述べ、現代の幼児音楽教育に多くの方向性と示唆を与えている。そして、幼児は日々音楽的に与えられるものだけではなく、生活の中でこそ無意識の内に様々な経験をしつつ音楽的な構築をしながら育っており、そこでは幼児と保育者の「言語使

用」「身体使用」の可能性に常に着目する必要性があるのではないだろうか。実際の保育場面では、幼児はその音楽構築の過程を、どのように感じ表わして積み重ねるのだろうか。そこで本研究では、幼児の音楽的な構築に園の日常生活における、保育者の音楽的な働きかけに対する幼児の受け止めに着目して、その音楽的構築を探ることとする。

## II 研究の方法

### 1、観察期間と回数 平成22年10月、2回

**2、対象児** トリーハブとソープの実験結果が、子どもの「身体的反応が乳幼児の音楽的認知を知る良い指標となる」と述べていることより、まだ多くの音楽的な構築をしていない、低年齢児への保育者の働きかけと、それに対する身体的な表われを、1〜2歳の幼児を対象として観察。A園1歳児クラス(保育者1名女)(M子1歳3ヶ月)・

**3、観察方法** 埼玉県近郊の筆者の所属する私立保育所で、生活の中での保育者の幼児への音楽的な働きかけと、それに対する幼児の音楽的構築の表われを2日間観察する。幼児の発する言葉も同様に筆記記録を行なう。必要な場面はビデオカメラにより録画。担当者に記録の妥当性を確認する。

## III 結果

### 1、保育場面における対象児の音楽的構築場面

#### (1) 事例

M子はベビーベッドの横側の見えにくい場所で、一人で機嫌良く、なにやら声をだしながら、座ってタオルを振って遊んでいる。他児は寝ている。M子と少し離れた場所にいる保育者が「Mちゃんいないなあ、どこにいるのかな」とゆっくり聞こえる声で語りかける。保育者の声を聴いたM子は、保育者の方を見て見つけると、ベッドの裏のさらに見えにくい場面に行き、保育者をじっとのぞいている。保育者が「いない、いない」と言いながらゆっくりと近づいてくると、M子はその後を継ぎ「だあっ」と大声でいい顔を出す。保育者はびっくりした顔をすると、M子はキャッキョッと笑い、二人で大笑いをする。「そこにいたのねー」と保育者が言う。次にM子は自分からベッドの裏に隠れるようにして顔を隠す。保育者がMちゃん「またいなくなったー」と言いながら保育者がもう一度「いない、

いない」とゆっくりというと、M子も「だあっ」といって顔を出す。そして二人で笑う。もう一度保育者が同じように「いない、いない、ばあ」とゆっくりと繰り返すと、M子は保育者の顔を見ながらそれに合わせて「ない、ない、だあ」と言って大笑いをする。

注1：M子は「いないないばあ」は日頃から好んでいるが、自分で言ったり合わせるのは初めてのことだという。

注2：「いないないばあ」の由来には多くの説があるが、日本では、幼児をあやすときに言う語として良く使われている。自分の顔を手などで隠して「いないいない」と言った後、突然「ばあ」と顔を出す。

#### M子の身体性と音やリズムへの気付き

- ・保育者の「Mちゃんどこかなあ」の言葉で、自分の身体（身体が見えないと思っている）身体を隠そうとする。
- ・保育者の「ばあっ」に合わせて身体を出して喜ぶ。
- ・「いない、いない、ばあ」の言葉の持つ音やリズムに身体を合わせる。
- ・「いない、いない、ばあ」の語りかけを自分から要求して身体を隠す。
- ・「ない、ない、だあっ」と自分でも言葉の音を発して同じリズムを味わい喜ぶ。

**【解説】**この事例でM子が「いない、いない、ばあ」を楽しんで行うには、3つのヒントがあるように思える。まず1番目は「身体性への気付き」である。M子は保育者が「いないなあ」と「どこかなあ」と探す言葉によって、自分の身体が見えないことが分かり、わざとベッド脇に顔をひそめた。保育者が促した身体性への気付きが楽しむきっかけとなっている。そして、2番目に「言葉の持つ音やリズムへの気付き」である。保育者が言葉の「リズム」を「いないない」と「ばあ」というゆっくりで分かりやすい音節でかたりかけているため、言葉の内容を伴った音やリズムの面白さに気付いていく。そして3番目はそれらを「保育者」という大好きな人と「身体性」を合わせることでM子にとってのアピールであり、喜びである。これらがM子が「いない、いない、ばあ」を自ら楽しんで行い、音やリズムを獲得するのに重要なことと考えられる。（その後のM子の日常の生活の変化）M子は、「いない、いない、ばあ！」が大層気に入ったようで、「Mちゃんどこにいるかなあ」という保育者の声かけだけで「きゃっきゃ」と笑って期待し、保育者と個のリズムを使

って調子を合わせるようになったとのことである。M子は「いない、いない、ばあ」を自分のものとしたと考えられ、この音のリズムの記憶は何らかの形で残っていくのだろう。

#### (2) 事例2 Y男（2歳3ヵ月）10月××日（晴れ）

散歩の途中である。保育者と手を繋いで歩いていた2歳3か月のY男が階段前で「もういや」と言って座り込む。手を繋いでいた保育者が「先生とお山を登ろうか」という。Y男は黙ってそのまま座り込んでいると保育者が「お山の向こうには何があるかな?」「原っぱでキリンがまっているかなあ（Y男はキリンが大好きである）」「いってみようか」と語りかけ、手を引っ張って促す。Y男が立つと保育者は「よいっしょ、よいっしょ。うんとこしょ」「おやまのてっぺんだれがいる」とゆっくりいいながら、大きく足を動かしながら階段を踏みしめるように登る。Y男も保育者と手を繋いで足並みを合わせて登り始める。Y男も階段を何段か上ると「よいしょ、よいしょ、うんとこしょ」と言いながら一緒に上る。周りにいた子どもたちも「よいしょ、よいしょ、うんとこしょ、おやまのてっぺんだれがいる」と合わせて唱え始めて、次第に大きな声になり合唱のようになる。

#### Y男の身体性と音やリズムの気付き

- ・保育者のY男に語りかける言葉で自分の山登りをする身体性をなんとなくイメージする。「山登りしようか」
- ・階段を上ることで、身体性のイメージを持ち獲得していく。
- ・「よいしょ、よいしょ、うんとこしょ」というリズムある語りかけの音やリズムを自分で味わいながら身体を動かす。
- ・「よいしょ、よいしょ、うんとこしょ」の同じ音やリズムの繰り返しを、保育者や他児と合わせて合唱のように繰り返し大きな声で歌うように唱える。

**【解説】**この事例でY男はまず、保育者の「山登り」の言葉の持つ意味を自分なりに身体性からイメージしていく。そして、2番目に「言葉の持つ音やリズムへの気付き」である。Y男は保育者の語りかける「よいしょ、よいしょ、うんとこしょ、おやまのてっぺんだれがいる」の面白い言葉の持つ音やリズムに、次第にひかれて身体を動かしていくのである。そして最後に、保育者と身体性を合わせて「言葉の持つ音やリズム」



を楽しむことでそれらを獲得していく。

## IV 考察

### 1、幼児が音楽的な獲得をするのに必要なこと

#### (1) 身体性を感じる

M子の「いない、いない、ばあ」の構築の経過をみると、M子の保育者（経験20年）「身体性を実況する言葉」で、「Mちゃん、どこにいる？」「いたねえ」「またいなくなった」など、M子が自分のいる「身体性」を意識できるように代弁している。またY男に対して保育者（経験5年）は、「がんばって一緒にお山に登ろうか」と「山登りする人」になって、動く身体の様子を語り「身体性の意識」を促している。1歳児のM子、2歳児のY男にとって、そこに自分の身体に気付いて動かすことが音楽的構築には重要であったと考えられる。幼児たちが後に身体を動かし「言葉の持つ音やリズム」を思い出し表すことがみえたことから、幼児の感じる「言葉の持つ音やリズム」は身体に入って残っていき、なんらかの形で身体を動かすことで表出が促されると考えられる。

#### (2) 言葉の持つ音やリズムへの気づき

保育者たちはいずれも「わかりやすく」「ゆっくり」「はっきり」と伝えている。

4/4拍子 | いないいない | ばあ | 休拍 |

4/4拍子 | よいしょ | よいしょ | うんとこ | しょ |

それらの言葉の意味は分かりやすく、いずれもリズムミカルで、4拍子のリズムで語りかけられている。また幼児にとって「いない、いない、ばあっ」は全て身体性を表わす言葉であり、「ばあっ」にはびっくりするような雰囲気や込められている。また「よいしょ、うんとこしょ」はいずれも「しょ」で終わるころ合わせが楽しい言葉遊びのようでもある。このような「言葉の持つ音やリズム」を保育者が意識して発することで、幼児はそこに身体性を重ねて、音楽的な気づきをしていくと考えられる。

これらを★音楽の3要素としてみると、●音である話し言葉の音域は日本古来の音階で心地よい ●リズムは一、二、三、といったのりやすい簡潔なリズムである ●ハーモニーは原始的ではあるが、これらの音やリズムを保育者と合わせて楽しめる。音楽的にもその要素があり、繰り返しの中で育つことが確認できる。

乳幼児は多くの音楽的なものを内面に持っているが、自由に行っているだけではそれらを上手く表せない。そ

れが「言葉を伴う音やリズムのモデルを表す」ことで、何らかの形で子どもたちがそれらを自ら発展して自得することが出来るようになると考えられる。

#### (3) 「音やリズムを一緒に味わう」こと

M子の音楽構築の過程をみると、M子は、保育者のM子の見え方を操作する語りかけの言語「いないない、ばあ！」によって、保育者に誘われるように身体性を音やリズムと共に重ねている。M子は保育者とリズムを合わせることで何よりもうれしくて大笑いをしている。またY男も、初めは嫌だった階段登りも、保育者とリズムを合わせ、さらに友だちたちとリズムを合わせることで楽しい山登り遊びとなっている。

中村（1993）は人と人とが関係性において諸感覚を通じて、身体で互いにリズム振動を感じ、引き込まれるように一緒にリズムを味わうことを「共振」という言葉で表している。そして知識で語り得ることのできないリズムの根源性へ着目する重要性を述べている。実際M子やY男は引き込まれるように身体が動かされて、保育者とリズムを重ねている。このように知識や言葉には表すことのできない、個々の子どもの根源的なリズムに触れる音やリズムを他と一緒に味わうことで、幼児は音楽的に成長を遂げるのではないだろうか。

これらのことから、今回の観察からは1、2歳児が音楽的な音やリズムを獲得するには、「身体性を感じる」「言葉の持つ音やリズムに気付く」「音やリズムと一緒に味わう」ことが重要なポイントになると考えられた。そして保育者が「音やリズムを伴う言葉の型」を作ったり伝承することで、幼児たちはそれらを自分なりに自由に使い楽しみながら自得することが出来ると考えられた。

## 2、わが国の幼児音楽教育における子どもの「音楽構築」の考え方

### (1) 我が国の音楽教育の歴史的変遷の外観

小田（1975）は「我が国の幼児音楽教育の歴史的変遷」において「東京女子師範学校附属幼稚園」での開園当時の音楽リズムのあり方を「遊戯であり、唱歌であり、体操である内容こそ、音楽リズムの出発点となるものと考えられる-略つまり動きと音楽との連絡を保つことを最良と指摘している」と述べる。その後、唱歌の中に含まれていた遊戯的な部分（歌いながら動くなど）は共同遊戯として取り込まれ、唱歌は独立して歌うこととして取り扱われ、それは昭和中期（戦前）

まで続いたという。それまで「歌」と「歌に含まれる言葉」「身体の動き」が関連し、音楽的に働きかけていたものが、「唱歌」として独立することにより、「身体の動き」と歌としての音楽が分離した感がある。

大正期になると鈴木三重吉の「赤い鳥」運動が始まり、童謡詩への人気が高まり、保育においても「童謡運動」が多く取り入れられた。ほぼ同時期に土川五郎によって音とリズムと表現の関係が提唱され「律動遊戯」という提言は童謡の多出とあいまって、芸術的思想を伴った。生理学的、心理学的の影響からも、遊戯教育が主張され、その理論と実践が戸倉ハル(1896-1968)によって継承され、昭和期の保育に大きな影響を与えたと述べる。

この時代の幼児音楽教育は、音楽とその表現によって、理知的な面だけでなく、幼児の心に合致して感情を育てる面にも重きを置いているという。この頃の幼児音楽教育は、「童謡運動」における童謡詩としての言葉が唱歌と共に生きて語られ、また「律動遊戯」としてのリズムや音が、保育者の言葉と相まって幼児の音楽構築に大きく影響を与えたと考えられる。その時代に幼い時代を過ごした人々の心の中には、「童謡」や「唱歌」とその言葉や振りが深く根付いていると、高齢者施設で音楽指導をした筆者が感じることもある。

土方(1920)は「律動遊戯の補遺」において、幼児の動作と、それに伴う指導を事細かに述べ、幼児がリズムや、その内容を身体性から理解できるよう配慮している。また土方は、これらの「律動遊戯」を芸術として捉え、真剣に保育者や幼児と向かい合い、言葉として伝えようとしていたことが、その文からみてとれる。土方の考えを受け継ぎ、昭和期の幼児音楽教育に大きな影響を与えた戸倉ハルは、生活の中での遊戯教育を述べている。

戦後、幼稚園教育要領が刊行、告示され、6領域に分けて、ねらいや内容が記された。領域ごとに指導することが求められたわけではないが、幼児音楽教育において「音楽リズム」が教科のように考えられ、幼児が上手に音楽ができる方向の指導に流れやすい傾向があった。

1990年に幼稚園教育要領が改訂、実施され我が国の幼稚園教育要領の総則に、幼稚園教育の基本を「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものとする」と明記され、幼児音楽教育においても領域「表現」は、「感じたこと、考えたことを自分なりに表現をすることを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性

をゆたかにする」ことを基として、5領域を総合的に捉えながら幼児自身の豊かな感性と表現を育てることが求められている。これらの幼児音楽教育の歴史の変遷を「言語」と幼児の「音楽構築」から捉えると、どの時代にあっても「言語」が幼児音楽や身体性と密接に結びついていたものの、大人側から一方向的に使われることが多かったと考えられる。

また1990年の幼稚園教育要領の改訂以降では、「環境を通しての保育」が基本とされたことから、幼児音楽教育における大人の「言語使用」において、子どもの身体性に関する言葉が減少し、メディアの影響もあり身体性への語りかけが様々な情報に偏りがちになる。例えば、今流行っているアニメの楽曲を取り入れる等、全ての幼児が肌で感じていないものを取り入れることもある。幼児の生活や身体性との密接な結びつきや、大人との協同による生活の中から溢れ出る音楽経験が薄れていると考えられる。また大人の「言語使用」が「言語」の域では表わすことのできない「音楽」の分野を支えるよりも、音楽と乖離して、独自になりやすい傾向がみえる。

## (2) 我が国の今後の幼児音楽教育における「言語使用」と「音楽構築」を考える

現在、日本は教育環境が恵まれている国であり、ほとんどの幼稚園や保育園が、それぞれ園独自の物的環境や人的環境を用意し、幼児自らが環境に関わることが重視されている。しかし音楽教育において、保育者側からの一方向的な「言語」だけによる音楽指導がなされたり、恵まれた音楽の物的環境や人的環境が、幼児が環境に自ら関わることが重視されるあまりに、例えばCDが鳴りっぱなしだったり、定期的に来るリトミック教師だけに音楽担当を任せたりと第三者的なものになり、音楽が子どもの心と乖離する可能性も未だにあると考える。

幼児自らの歌や詩やリズムが湧き上がる園もある一方で、例えばインタビューで多くの保育者が「ピアノ」を重視しているように、我が国の多くの幼稚園は各部屋にピアノを用意され、保育者が決まったように一方的にピアノを弾くことも行われやすい。そこではピアノと音楽と幼児との関わりが問われることもなく、習慣的にピアノの音を幼児に与えることにもなる。また、多くの手遊び歌や歌を用意し、音域やテンポの速さ、リズムを省みることなしに保育者の赴くままに一斉に音楽活動を行う。それが保育者によって都合良く準備

されていても、幼児の思いに即した心地良いものとは限らないのである。現場にいる筆者は、これらのことを反省とともに思うのである。幼児にどんな素晴らしい教材を与えても、その教材も含めた場所が幼児自身のものになっていなければ音楽的な構築にはつながりにくい。

今後の幼児音楽教育において、このような現在の状況を踏まえながら、幼児音楽教育の歴史上に見られた丁寧な「音やリズムを伴う言語」を生活の中で発展させながら使用し、伝承していく大切さが求められる。本研究においても、幼児の音楽構築過程における「言語使用」は、子どもの心が揺り動かされ、身体への気付きと共に人と合わせる体験を誘う、という可能性があることが理解できた。大人が幼児と向かい合いながら、言葉を伴った音楽的経験をを行い、幼児と協同しながら音楽構築をする必要性がみえた。

## 参考文献

- (1) 青木久子 (2008) : 教育学の二律背反からの脱却 : 教育対象の場所 (トポス) 論 日本教育学会大会研究発表要項誌 (67) 東京, pp58-59
- (2) 小林剛士 (2010) : 協同的な音楽構築過程における言語使用-その種類と機能に関する検討- 日本音楽教育学会第 41 回研究発表 0-4、平成 22、9、26
- (3) 名須川知子 (2001) : 「幼児期の身体表現教育における「定形性」の意味 : 都倉ハルの遊戯作品分析を手がかりに」 兵庫教育大学研究紀要 (21) pp75-86
- (4) 小田豊 (1975) : 「音楽リズム」の内容論(1) : その歴史の変遷 滋賀大学教育学部紀要 (25) pp175-185
- (5) 小川由美 (2011) 「言語獲得と音感覚との相関性 ～日本語に支援を要する子どものわらべうた実践における様相～」 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要(2) pp25-32
- (6) 土方五郎 (1920 「律動遊戯の補遺」 幼児教育 20 (11) pp385 - 388
- (7) Dorothy,M.Gene,S.(2003):Musical Growth And Development(神原雅之,難波正明,里村正英ら) : 音楽的成長と発達—誕生から 6 歳まで. 溪水社,広島
- (8) 細田淳子 (2004) : ことばの獲得初期における音楽的表現(10).日本保育学会誌(57)東京, pp172 - 173
- (9) 小林宗作(1978) : 大正・昭和保育文献集. 日本ライブラリ, 東京.
- (10) 小山朝子 (2004) : 乳幼児期におけるコミュニケーションとしての音楽表現保育学研究, 日本保育学会, 保育学研究 42(2), 129-138, 東京 pp129 - 138
- (11) 持田京子・金子智栄子(2008) : 子どもの創造的音楽表現に及ぼす保育者の影響. 文京学院大学人間学部研究紀要 第 10 巻 1 号, 東京 pp38-39
- (12) 持田京子 (2009) : 幼児の共振と音楽的発達.日米高齢者保健福祉学会誌(4), 東京, pp111 - 121
- (13) 中村雄二郎(1993) : 表現する生命. 青土社, 東京.  
Rudolf,E, Radocy. J,David,Boyre(1979) : Psychological Foundations of Musical Behavior. Charles C.Thomas・Publisher,(徳丸吉彦,藤田美美子,北川純子 (訳)(1998) : 音楽行動の心理学.音楽之友社,東京)
- (14) 梅本堯夫(2003) : 子どもと音楽. 東京大学出版会, 東京
- (15) 山下郁子 (2003) : 国立音楽大学附属幼稚園紀要. 「3 歳児のリズムの獲得」 東京
- (16) 山下郁子 (2005) : 国立音楽大学附属幼稚園紀要 「総合リズム教育の理論と実践」,東京